

## <研究ノート>高野山宝幢院領淡路国賀集荘の伝領について

著者	千葉 哲司
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	43
ページ	113-118
発行年	1991-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10409">http://hdl.handle.net/10114/10409</a>

## △研究ノート▽

## 高野山宝幢院領淡路国賀集莊の伝領について

千葉 哲 司

## 一

淡路国賀集莊は現在の兵庫県三原郡南淡町に位置した莊園であり、周辺には国衙・国分寺等も存在し、島内で最も開発の進んだ地域であったといえる。

同莊の伝領については一般に次のように理解されている。すなわち建久三年三月日の後白河院庁下文案<sup>(1)</sup>には「從二位高階朝臣家知行」として所領が列挙され、その中に「淡路国福良・賀集莊<sup>(2)</sup> 高野宝著三昧院領」と見え、後白河上皇寵妃の丹後局の知行であり、高野山宝塔三昧院領であったことが知られる。同院はやがて宝幢院と改称したらしく建仁三年十月二十日の紀伊国司庁宜や貞応二年の淡路国大田文においては「宝幢院」と記されている。南北朝期になると文和二年三月五日の三条公秀讓狀には「長講堂領淡路国福良賀集西山三箇庄」とあって、長講堂領莊園として三条家が相伝しており、応永十四年三月日の宣陽門院御領目録にも「同国福良賀集莊 三条宰相中將家」と見えている。鎌倉期の高野山宝幢

高野山宝幢院領淡路国賀集莊の伝領について（千葉）

院領から、何らかの契期によって南北朝室町期の三条家へと伝領したと考えられているといえる。<sup>(3)</sup>  
ところがこの理解には、次に掲げる京都大学文学部所蔵「勸修寺家文書」中にある二通の讓狀に解れていない。そこで同文書を利用して若干の見知を示したいと思う。

## 二

先にのべた二通の讓狀とは次の二点である。

## 史料 A

讓渡 所領等事

一、加賀国井家庄

件庄者、延勝寺御領、宣陽門院御知行也、宣旨・官

符・宣陽門院御教書・故浄土寺二位殿御書狀等有之

一、大和国円福寺

件庄者、後白河院御起請之地、院庁御下文并代々長者

宣等有之

## 一、高野宝幢院并淡路国賀集福良西山庄

件寺并庄者、御白河院御起請之地、寺院庄家等文書宣陽門院御教書・故浄土寺二位殿御讓狀等之有、宝幢院者、御白河院御祈願所也、彼院主職、撰器量可被補也

## 一、尾張国朝日中郷庄

件庄者、宣陽門院御領也

一、八条坊門万里小路領宅<sup>見本券</sup> <sup>四至榜示文數</sup>

右件庄園寺京地等、各皆為由緒相伝之地、帶次第証文、領知年久、收無異論、而今愚父齡闇病侵之間、相副相伝文契等、所讓渡長嫡侍從業光也、至于彼子孫孫進退領掌、更不可有他妨、抑拾遺已為長嫡得此、附屬舍弟等事、面々可垂憐愍之愛也、但於違背于拾遺心之輩者、非其限而已、仍処分如件

貞応元年八月日

沙弥尋蓮判

## 史料 B

ゆつりわたしまいらす、御庄々やち、もんそとも、物く仏<sup>(具)</sup>

くとももの事

一、かゝのくにのいゑの御庄<sup>(屋地)</sup> <sup>(文書)</sup> <sup>(具)</sup>

一、ひちうのくに宝塔院両法華堂<sup>(備中)</sup>

一、ちそくゐんのやち、ならひに無對光院地藏堂等<sup>(知足院)</sup>

一、文車のもんそとも<sup>(庫)</sup>

一、家中の物具とも

一、あはちのくにかしう、ふくら、にしや<sup>(淡路國)(賀集)(福良)(西山)(主脱)</sup>

## 一、高野宝幢院

右件の庄園領地、あるいはちうたいのせうもん、本くゑんにまかせてしそん相伝すへきよし女院の庁御くたしふみをたま<sup>(重代証文)(公驗)</sup>

はりて候、あるいゝ又かはりをぬしにたひて本けんてつきを<sup>(下)(給)</sup>

かへとりて候、はゝもたせたまひたるちにくして、いゑつ<sup>(券手巻)</sup>

くりて、はゝ御せんにまいらせむとし候しかとも、はかなく<sup>(母)(達)</sup>

うせられ候にしかは、おのゝしたいのせうもんをくして、<sup>(造)</sup>

いゑのうちのものゝくにいたるまで、治部卿殿御つほねにゆ<sup>(物)(具)</sup>

つりまいらせ候、このやをへ御たうにして、浄土寺とのゝ御<sup>(喜提)</sup>

はたいとふらひまいらせんするよし、女院へ申て無對光院と<sup>(供僧二人)(盛置)</sup>

申候、くそうふたりなしをきて候、くれうにゐのいゑの御<sup>(年貢)</sup>

ねんくのうちを五石つゝたひ候所をへ、ほうたうゐんのねん<sup>(寶塔院)</sup>

くにて御さした候へし、これらけたいなくして、御庄々をへし<sup>(解愁)</sup>

らせたまふへく候、又おとゝひとめんゝにあはれみはく<sup>(兄弟共)</sup>

ゝませたまふへく候、たゝし、御心にたかはんおとゝひとと<sup>(賀王法師)</sup>

ハ御さたあるへからす候、この中にきくわうほうし、大夫とを<sup>(菊王法師)</sup>

ハ、なかくふけうして候そ、あなかしこゝいゑのうちへも<sup>(水)(不孝)</sup>

いれ、物申さん御みゝに、きゝいれさせたまふな、かく申を<sup>(耳)</sup>

きたればとて、物おほせらるな、大夫もきくわうも、あさま<sup>(御)</sup>

しきふたうの物ともにて候へハ、なかくとをくふけうして<sup>(不當)</sup>

候そ、御心にしたかふへきよし申てまいりて候とも、ゆめ<sup>(寄)</sup>

くゝよせさせたまふましく候、もし又おとゝひの中にも、わ

れこそこの御庄をはしる<sup>(知)</sup>へけれど申ことありとも、それをハ  
ぬす人<sup>(本意)</sup>にそして、ほんけへ申て、御さた候へし、又女院へも  
治部卿殿にゆつりまいらせ候よしをへ申きて候也、又せん  
さい御せんと、中よくてたかいに思あひて、なにこともおほ  
せられあはせてをへしませ、いよのくつなをへせんさい御こ  
せんにゆつり候也、このき、ゆめくたかひ候まし、のちの  
せうものためにしるし申也、あなかしこく

嘉禎三年二月八日

宮内卿平朝臣判  
光 蓮判

史料A・Bともに高野宝幢院と淡路国賀集荘が記されており、  
それらが史料Aでは沙弥尋蓮から侍従業光に、史料Bでは宮内卿  
平朝臣から治部卿殿御局に譲与されている。『尊卑分脈』に侍従  
業光・宮内卿平朝臣を求めてみると、次の系譜を見出すことがで  
きる。

相模守木工頭  
使左衛門佐正五下  
房 業 兼 業 光  
治部卿從三 正四下  
宮内卿  
母從二高階兼子

したがって史料Aは平業兼譲状案、史料Bは平業光譲状案と考え  
られる。

ここで問題となるのが高野宝幢院・賀集荘と、平業兼らとの関  
係であろう。史料Aの譲状に見える荘園は、宣陽門院との関りを  
示すものが多い。この宣陽門院は、後白河院と建久三年三月の後  
白河院庁下文によって知行を承認された丹後局との間に生れた人  
物である。さらに『尊卑分脈』に見えるように業兼の母もまた丹

後局であり、宣陽門院と平業兼とは異父兄妹という関係なのであ  
り、そのため「宣陽門院御教書・故浄土寺二位殿御譲状」が業兼  
に与えられ、高野宝幢院と業兼の間に関係が生じたものと考えら  
れる。宝幢院は賀集荘に対して荘園領主として存在するが、その  
宝幢院に対して業兼は、「彼院主職、撰器量可被補也」とあるよ  
うに院主職の補任権を保持している。業兼の譲状に宝幢院と賀集  
荘が併記されるのは、このためであろう。

さて父業兼から所領を譲りうけた平業光は、治部卿殿御局なる  
女性に所領を譲与する。この女性はその呼称から考えれば父業  
兼の妻・業光の母が考えられるが、業光譲状にも見えるように母  
は「はかなくうせられ」て存世していない。後にのべるように、  
業光の所領の多くは業光の娘婿の譲状に現れ、娘を介して他家へ  
と伝領されるのであるが、業光の譲状と娘婿の譲状との間には約  
四十年の差があり、業兼と業光の譲状の間が十五年であることを  
考えると治部卿殿御局と業光の娘が同一人物とは考えにくい。業  
光の母・娘が譲与対象から外れるならば残る近親は姉妹であり、  
治部卿殿御局は業光の姉妹と考えたい。さらに奥に業光と並んで  
署判を加えている光蓮なる人物であるが、この時代の譲状におい  
て、譲与者と被譲与者が並んで署判を加える例が見られることか  
ら、光蓮が業光から譲与をうけた人物と考えることができ、治部  
卿殿御局は光蓮と解したい。

平業兼からの伝領を考えると、平業兼→平業光→業光姉妹(光  
蓮)→業光娘、ということになる。

## 三

先に業光の所領の多くは娘婿の讓状に現れると記したが、その娘婿とは吉田経俊であり、平業兼・業光の讓状が勧修寺家文書中に伝来する所以であるといえよう。経俊の子息である俊定の『公卿補任』の尻付には、「母侍従平業光女」と記され『尊卑分脈』にもほぼ同様の記載がある。

平業光の娘を妻とした吉田経俊は、妻の相伝した所領も含めての讓状を建治二年十月の死の前日に作成している<sup>10)</sup>。平業光讓状に見える所領のうち吉田経俊讓状に見えるのは、加賀国井家荘・備中国宝塔院・同法華堂の三カ所で、本稿の中心である賀集荘を見ることはできない。経俊の孫の定資讓状においても記されるのは同じ三カ所であり、加賀国井家荘などと賀集荘はこの時点までに別個の人物に讓与されたと考えねばならないであろう。

では、どの時点で誰に、という問題が出てこよう。この点について明らかに示す史料は存在しないが、賀集荘が南北朝期以降、三条家の家領として存在していた事とあわせて考えてみたい。先に示したように、文和二年の三条公秀讓状作成の時点で賀集荘は三条家の家領となっており、それ以前に三条家へと伝領されていなければならぬはずである。その事から平業兼一族・吉田家・三条家を結びつけることのできる人物を『尊卑分脈』に探してみると、一人の女性を見出すことができる（以下、末尾の賀集荘伝領関係系図を参照）。その女性とは、業光の娘の夫となった経俊のめいに当たる人物である。経俊の兄為経の娘であるこの人物

は、三条公貫の妻となっている。三条公貫とこの女性の孫が、文和二年の讓状作成者の三条公秀である。光蓮から所領の讓与を受けた業光の娘は、夫経俊の讓状作成以前、おそらく三条公貫との婚姻等の際、その所領のうちから賀集荘をめいに讓与したのではなかろうか。経俊の讓状作成の時点で賀集荘は既に三条家の家領となっていたために、経俊はその子孫に讓与することができなかったと考えたい。『尊卑分脈』には三条公貫の子として公勝という僧が見え、そこには「宝幢院」と記されている。この宝幢院が高野宝幢院であるならば、三条家と宝幢院との間には密接な関係が想定できる。その関係とは先に平業兼讓状でふれた院主職の補任権であり、三条家が宝幢院の院主職補任権を手に入れた結果、公勝が宝幢院院主に補任されたと考えることができよう。すなわち賀集荘が三条家へと讓与されたため、それに付随して賀集荘の領主である宝幢院の院主補任権も三条家へと移ったのである。

このように三条家が賀集荘をその家領とするのは、南北朝期ではなく鎌倉時代の後期、母系による伝領であり、三条公貫がその子の実躬の時代であると考えたい。

## 四

以上のように賀集荘の伝領を考えてきたが、次に宝幢院・平氏・三条家が賀集荘に所持した職は、どのような職なのかを考えてみたい。先にふれた三条公秀讓状には賀集荘が長講堂領であることが記されており、応永十四年の宣陽門院所領目録・応永二十年の長講堂領目録<sup>11)</sup>にもその名が見えることから、南北朝期以降は長講

堂を本家としていたと考えられる。ところが、鎌倉時代建久二年の長講堂領目録<sup>(12)</sup>・貞応三年頃の宣陽門院所領目録<sup>(13)</sup>には賀集荘の名を見ることはできない<sup>(14)</sup>。

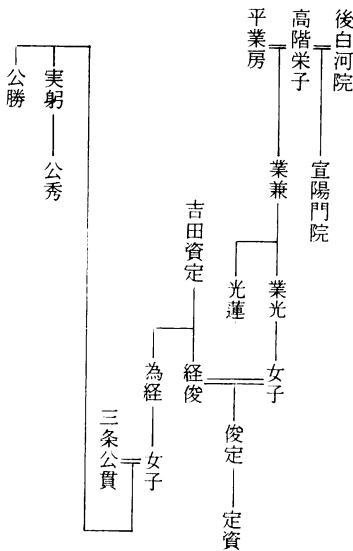
周知のように長講堂領は、皇室領荘園中でも最大規模のものであり、後白河院から宣陽門院へ、さらに鷹司院を経て安嘉門院へ、そして持明院統へと伝えられてゆくのである。平業兼讓状には賀集荘について「後白河院御起請之地、寺院庄家等文書宣陽門院御教書・故浄土寺二位殿御讓状等有之」と記し、井家荘については「宣陽門院御知行地」と記し、両者の間には表現の違いが認められる。井家荘は一貫して長講堂領と記されていることと、鎌倉期には目録中に賀集荘が見えないことも関連もあるうが、賀集荘においても後白河院や宣陽門院との密接な関係は想定できよう。さらに平業光讓状になると所領を列挙し、一括して「女院の庁の御くたしふみ」を給わると記している。業光にとっては井家荘も賀集荘も共に、宣陽門院から下文の発給をうける対象であり、両者に差異は認められない。これらの事から考えて賀集荘は、鎌倉期に長講堂領目録中にその名は見えないものの、その成立の当初から長講堂を本家としていたと考えて差し支えないのではなかろうか。

このように後白河院や宣陽門院と密接な関係を持つ賀集荘は長講堂を本家とし、領家の地位には宝幢院もしくは宝幢院院主補任権を持つ平業兼一族があったものと考えられる。そしてその地位は、女性の婚姻により吉田家を経て三条家へと伝領したと考えられ<sup>(15)</sup>、その時期は鎌倉後期であるといえよう。

高野山宝幢院領淡路国賀集荘の伝領について（千葉）

最後に高野山宝幢院であるが、現在高野山内には宝幢院の名を持つ寺院は存在しておらず、高野山大学の裏手に宝幢院谷の地名が存するのみであり、早く廃絶したようである<sup>(16)</sup>。三条家において宝幢院と関わっているのは史料上公勝のみであり、賀集荘が三条家へと伝領されて間もなく廃絶したのではなかろうか。末尾に関係図を示し本稿の結びとしたい。

賀集荘伝領関係系図



註

- (1) 『鎌倉遺文』二卷五八四号
- (2) 『鎌倉遺文』三卷一三九三号
- (3) 『鎌倉遺文』五卷三〇八八号
- (4) 『大日本史料』六編之十七
- (5) 『大日本史料』七編之八

- (6) 『角川日本地名大辞典 28 兵庫県』賀集荘項。
- (7) 中村直勝「勸修寺家領に就いて」所引『中村直勝著作集』第四巻
- (8) 例えば正治二年一月廿八日付吉田経房議状案など。
- (9) 註(7)論文においては、光蓮が吉田経俊の妻となったと解しているが、『公卿補任』等により光蓮と経俊妻は別人と解したい。
- (10) 『鎌倉遺文』十六巻一二五二〇号
- (11) 『大日本史料』七篇之十九
- (12) 『鎌倉遺文』一卷五五六号
- (13) 『鎌倉遺文』五巻三二七四号
- (14) 長講堂領については『国史大辞典 9』の長講堂領一覧が便利であり、同表によれば建久二年の長講堂領目録に賀集荘が記されているように表現されるが、管見の限り同目録に賀集荘は見出せなかった。
- (15) 註(6)書によれば三条家を預所としているが領家職と考えた。
- (16) 高野山大学教授和田秀乗先生御教示による。
- 〔付記〕法政大学中野ゼミでは、現在兵庫県三原郡南淡町の護国寺所蔵文書を調査中である。同寺は賀集荘と密接な関係にあり、賀集荘関係史料を検討する過程で本稿は成ったものである。

## 法政大学文学部紀要 論題(史学科)

号

- 二七 鎌倉時代における「公田」について  
中野栄夫
- 二八 象郡の位置について  
河原正博
- 二九 近世後期、江戸近郊農村の性格について  
村上直
- 『増上寺領并古料明細帳』を中心に—
- 三〇 直弧文の展開  
伊藤玄三
- 三一 法政大学図書館蔵 田中光顯文書(伊藤博文関係)  
安岡昭男
- 解題目録
- 三二 「淡路国大田文」をめぐる  
中野栄夫
- 付論、大田文研究の現状と課題〔補遺〕—
- 三三 宮城県木戸瓦窯跡出土の文字瓦  
伊藤玄三
- 郷里制の資料の一例—
- 三四 『花押かがみ 二』文書名索引  
中野栄夫
- 三五 八世紀前後の北海道と東北の交流  
伊藤玄三
- 三六 明治十九年長崎清国水兵争闘事件  
安岡昭男